

# 江戸住大商人の信仰と「行動文化」論 「御仏勅」の実践から

岩淵令治

Edo-based Merchants' Faith and "Behavioral Culture" Studies : Messages from the Buddha in Practice  
IWABUCHI Reiji

はじめに

① 加藤家の概要

② 三代当主の「御相続方」にみる加藤家の信仰の基調

③ 先祖供養と他者の救済

④ 講

⑤ 加藤家による寄進

⑥ 加藤家と「霊夢」・「御告」・「御仏勅」

おわりに

## 【論文要旨】

江戸の商人研究は、史料的な制約と流通史研究の関心から、長らく上方に本拠をおく他国住商人の江戸店、とくに呉服など限られた職種の間屋の分析に限られてきた。近年、江戸住商人をとりあげた論考も蓄積されつつあるが、とくに彼らの信仰の検討は不十分である。そこで、本稿では、質屋・古着商売の大店美濃屋加藤家を素材として、江戸住商人の大店の信仰を検討した。

加藤家の信仰の基調は浄土宗であり、「陰徳」を積んで浄土に旅立つことに目的があった。そのため、自身の家の先祖供養を行うとともに他者を救済し、さまざまな講を組織し、また家としても寄進を行ってきた。「陰徳」や、「名聞ヶ間敷」行為を避けるという点に、多くの商家が規範とした心学との整合性も認められることが注目される。とくに信仰の対象となったのは、甲斐善光寺と菩提寺の哲相院である。甲斐善光寺については、宝暦四（一七五四）年の火災からの再建にあたって莫大な寄進を行い、また江戸の旅宿を通じてその後も寄進を続けた。また、哲相院については先祖供養のみならず、最終的には甲斐善光寺の江戸の旅宿を設けている。このほか、信州善光寺、

高田善導寺、江戸の十八檀林の一つである本所靈山寺、といった有力な浄土宗寺院にも寄進が及んだ。さらに浄土宗寺院にとどまらず、高野山での先祖供養、浅草観音や清涼寺への寄進など、信仰は他宗派の寺院、神社にも及んだ。

こうした信仰の上に立って、加藤家では家族の人生儀礼のみならず、経営においても判断基準として「霊夢」や「御告」を用い、さらには「御仏勅」を求めた。その信心の実際は判断できないが、少なくとも納得する手段として重要な役割を果たしたのである。さらに、非日常的に行われる参詣や、開帳への参加も、こうした信仰と次元を異にするものではなかった。その参加にあたっては、「御仏勅」が働いたのであり、加藤家の信仰の一角を形成したのである。

これまで江戸商人の信仰については、「行動文化」論の中で、いわば観光の要素を持つ参詣や祭礼の参加などがとりあげられてきたが、日常の信仰と合わせてその全体像を検討していく必要があるだろう。

【キーワード】 江戸住商人、寄進、参詣、行動文化

## はじめに

近世は、統一政権による「平和」と、庶民の生産力の向上を背景に、文化の商品化、大衆化が大きく進んだ時代である。宗教についても、権力の支援を受けられなくなった寺社が自力で経営資金を獲得するため、自らの魅力のアピールに動き出していった。<sup>(1)</sup>

本共同研究が分析対象とする「懷溜諸屑」に納められたさまざまな寺社の略縁起の刷物も、こうした寺社の活動のあらわれである。その略縁起の一つに、甲斐善光寺の「燈籠仏」の略縁起がある（第五冊所収「燈籠仏縁記」 図1）。右によれば、燈籠仏は「信州善光寺如来の分身にして一寸八分の尊像」で、封印された「秘仏」であった。

この小型の秘仏は願い事を占うことができるとされ、持ち上げた時に重く感じれば願い事が叶う、として信仰を集めた。<sup>(2)</sup>当初は軽重でわかるのは往生できるかどうかであったが、享保七（一七二二）年の縁起では、願を実現するための具体的な方法や、屋敷・店替の方角や夫婦の縁など利益の対象が具体化する。そして、甲斐国のほか、三都でも出開帳が行われた。江戸では、公式な出開帳が享保七年以降、宝暦元（一七五二）年・文化一二（一八一五）年・天保七（一八三六）年の計四回確認され、このほか明暦二（一六五六）年にも甲斐善光寺の出開帳にあわせて開帳が行われた可能性が指摘されている。江戸町人の信者としては、遅くとも元禄一〇（一六九七）年には小石川藏田宗専が「施主」として確認できる。<sup>(3)</sup>

「懷溜諸屑」所収の「燈籠仏縁記」には年紀がないが、同文の東京都立中央図書館本では「天保七申年六月朔日ヨリ」と書き込みがあることから、天保七（一八三六）年六月一日より七月一日に浅草西福寺で行われた燈籠仏の開帳で頒布された可能性がある。江戸において、燈籠仏は

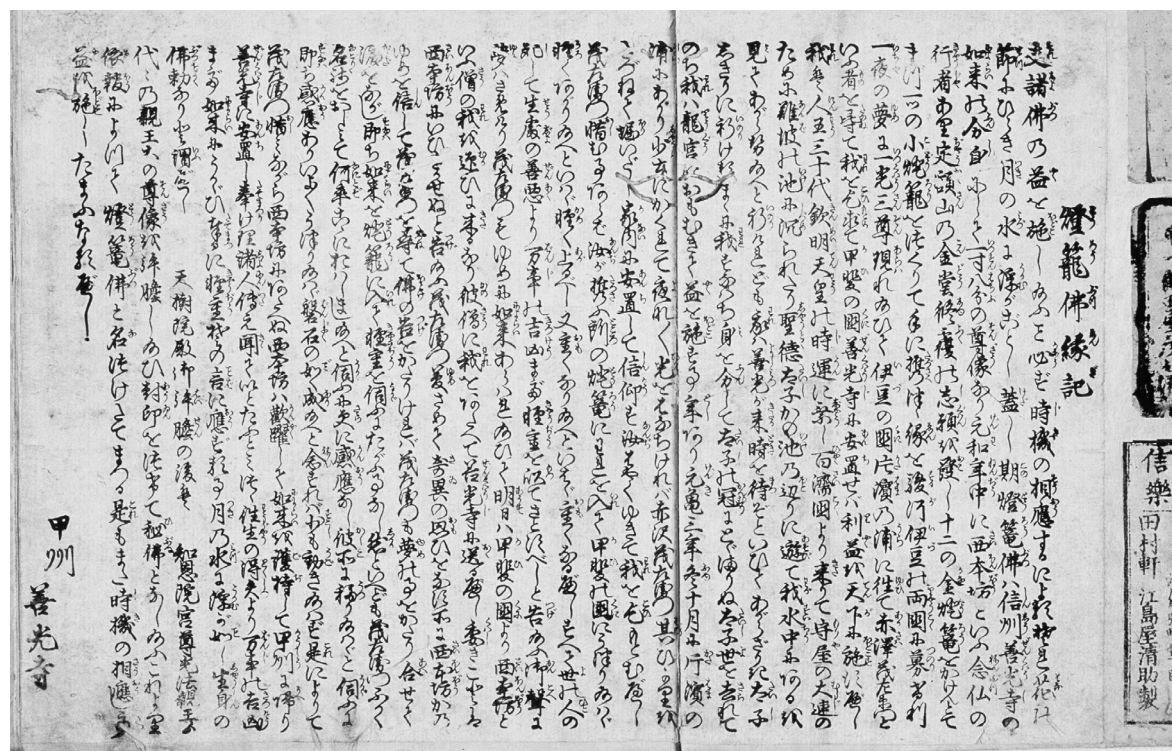


図1 燈籠仏縁記（国立歴史民俗博物館蔵『懷溜諸屑』五所収）

文政期後半の川柳や鶴屋南北『東海道四谷怪談』(文政八(一八二五)年)初演にとりあげられるなど、話題となった。

この天保七年の燈籠仏の開帳直後に、「甲州善光寺如来御影」(図2 一九一四八)を「不思議ニ手ニ入申候」という商人がいた。浄土宗と甲斐善光寺を篤く信仰し、江戸通油町にて古着・質屋渡世を営んでいた美濃屋加藤家の当主である。加藤家は、天保九(一八三八)年に甲斐善光寺の指示で、江戸で評判になっていた旗本多作左衛門が所持する「一光三尊ノ仏」の画像を確認した「順庵庵諦善講中油丁加藤権兵衛」として「善光寺記録」に登場する、有力な江戸の信者であった<sup>(5)</sup>。

近世の商人の信仰の検討は、経営理念や指針への影響が中心であり、とくに近江商人を事例に、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』との比較、および近代化論における議論に集中している。内藤莞爾は浄土真宗の教義と近江商人の伝記類の関係を検討し、職業について仏恩に対する報謝・報恩として宗教的な意味づけがなされ、大乘仏教の倫理に基づいて「自利利他円満」が目指されたが、営利への勧めは展開しなかったとした<sup>(7)</sup>。この内藤の捉え方は、ベラーの近世日本宗教論にも取り入れられ、今日でも影響力を持っている<sup>(8)</sup>。これに対し、芹川博通は、近江商人の本貫地の寺院の分布、家訓の検討から、信仰の中心は浄土教(真宗と浄土宗)にあり、日本資本主義の精神の形成において政治的・社会的構造を重視するベラーに対しては、宗教的経済倫理を重視し、その中核を仏教の経済倫理に求めた上で、やはり日本の近代化の源泉をみている<sup>(9)</sup>。しかし、先祖供養や寄進行為などは指摘されるものの、実際の商業活動や生活における具体的な信仰の機能については、未検討である。

また、江戸商人の研究は、史料的な制約と流通史研究の関心から、長らく上方に本拠をおく他国住商人の江戸店、とくに呉服・木綿など限られた職種の間屋の分析に限られてきた。そして、江戸の商人全般の信仰

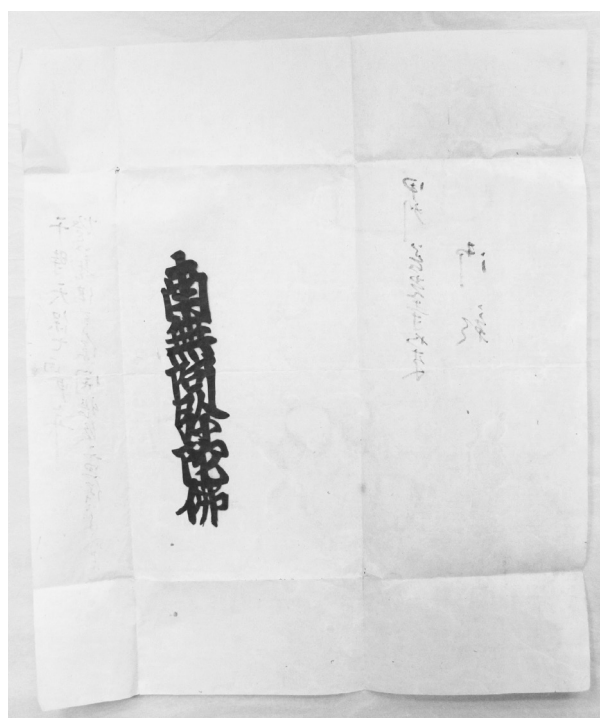


図2 加藤権兵衛が入手した「甲州善光寺如来御影」  
(国立歴史民俗博物館蔵美濃屋加藤家文書ク1706-19-48  
「南無阿彌陀佛」(型紙カ))

については、ひんぱんな開帳と参詣活動、および祭礼に焦点があてられてきた。こうした中で、筆者は、江戸の都市社会の分析において、江戸を本拠とする江戸住商人の検討が不可欠であることを指摘し、中年奉公などの奉公人供給のあり方や商家同族団の形成、木綿・呉服などの間屋とは異なる職種や業態での経営の特色、関東の豪農商とのつながり、江戸における積極的な文化的活動など、他国住商人とは異なる側面を指摘してきた<sup>(11)</sup>。ただし、信仰については、出自や年齢が様々である奉公人や、同族団を統合する側面を指摘するにとどまった。近年、江戸住商人をとりあげた論考も蓄積されつつあるが、信仰の検討は不十分である。そこで、本稿では、この加藤家を素材として、本格的な検討が行われてこなかった江戸住商人の信仰を検討したい。

なお、江戸住商人の信仰を考える上で、留意しなければならないのが、

西山松之助の「行動文化論」である<sup>(13)</sup>。西山が述べる行動文化とは、一八世紀中頃以降に支配―被支配者の諸矛盾が著しく進行する中で、諸矛盾を解消して、被支配者たちの自由を得るための願望が様々な文化的活動となって爆発的に顕在化してくる「行動そのものが自己解放になるような、無目的で即自的行動」で、神社・仏閣への参詣、湯治、納涼、花見、縁日、開帳、茶の湯、おどり、音曲など多様な文化的行動を指す。

この行動文化論について、寺社参詣史を検討する原淳一郎<sup>(14)</sup>は、西山が町名主の斎藤月岑をモデルとしていながらすべての江戸町人に適用している点に階層差への欠如を指摘し、都市知識人層とは異なる中下層民の参詣行動を検討した。さらに西山が「自己解放」において「都市的な信仰形態」自体の分析が不十分である点を指摘した上で、西欧・日本の文化人類学に学びながら「自己解放」を再定義し、寺社参詣においては、信仰性の保持による無意識的な「身体的自己解放」と、行楽性による意識的な「精神的自己解放」が併存し、時期や階層によってそのあらわれ方が違うと述べている。

一方、旅行史を検討する高橋陽一<sup>(15)</sup>は、西山の行動文化論における参詣と新城常三<sup>(16)</sup>の両者に共通する問題として「旅の解放性」という文脈をあげ、「貧農史観・階級闘争史観の中で、抑圧から解放される唯一の方法である旅が楽しく、観光の要素の濃いものでなければならなかった」とみた上で、今日も続く「近世の旅＝観光旅行」「信仰は建前、本音は観光」という近世の旅に関する主張を批判する。そして、高橋は、「旅の基本的な目的が信仰にあり、観光がその行程の中で時折付随的に体感できる経験であった」とし、観光の要素が強い与否か実際の旅行者の記録からの検証が必要であるとする。

西山が、江戸ツ子の二つの位相を指摘しながら、行動文化論では階層性が等閑視されているという批判は、筆者も同感である<sup>(17)</sup>。また、観光の要素のみが強調されてきた点も問題であろう。ただし、観光か信仰かと

いう問題については、非日常の参詣と、日常的な信仰の関係も検討する必要があるのではなからうか<sup>(18)</sup>。本稿では、加藤家を事例として、江戸住商人の本店という階層について、まず日常の信仰を明らかにし、その上で開帳や参詣との関係まで見通していきたい。

まず、加藤家の概要を確認し<sup>(1)</sup>、家訓から信仰の基調を確認した上で<sup>(2)</sup>、講・寄進など信仰に伴う具体的な活動を検討し<sup>(3)～(5)</sup>、最後に「霊夢」・「御告」・「御仏勅」に注目して、信仰と経営や参詣などの諸活動との関係を検討したい<sup>(6)</sup>。

## ① 加藤家の概要

まず、前稿にもとづき、加藤家の成長過程を確認しておく（なお、以下とくに断らない限り、典拠は国立歴史民俗博物館所蔵の美濃屋加藤家文書であり、引用にあたっては、H一七〇六を省略した資料番号で表記する）。

加藤家の初代は牛込生まれで、一九年間の奉公の後、横山町二丁目の裏店に開店し、同町の表店を経て享保六（一七二一）年三月二三日に通油町南河岸通りに地借として表間口九尺奥行七間の店舗を構え、古着商売・質屋を営んだ。のち、店舗は明治一五（一八八二）年に新大坂町に、さらに同三九年の段階では牛込岩戸町に移転している<sup>(20)</sup>。

初代が奉公先から得た元手金は金五〇両であったが、その後質屋の開業や町屋敷の購入など三代当主の時期に大きく資産を伸ばした。文政四（一八二二）年四月一二日の段階では、奉公人もふくめ「家内人数拾六人」で、江戸市中に町屋敷五箇所と柳原に髪結床の株を所持していた。五代当主が天保八（一八三七）年に家督相続した際には約一万両を引き継ぎ、安政六（一八五九）年下半期分の資産は、町屋敷・御用金と諸方への貸付金、有金など金一万二〇〇両余となっている。

幕府の御用金賦課においては、三井や勘定所御用達にははるかにおよびないが、文化一〇（一八一三）年に一〇〇両（一〇一四七）、嘉永七（一八五四）年に金二五〇両を単独で納めた（一三・七七・二・二・二〇・一五・一・三ほか）。さらに弘化元（一八四四）年には本丸炎上のためとして出願が認められ、金一三〇両を南町奉行所に（四・一・一〇・一九、一三・七七・一）、文久元（一八六一）年にも同様の理由で金二〇両を北町奉行所へ上納している（一〇・三三）。このほか、慶応元（一八六五）年九月には、「御進発御用」として四〇〇両を納めた（一〇・一八）。

店舗は地借であるものの、他町での町屋敷所持のほか、旺盛な貸金活動、奉公人や生活を維持する出入の存在などから、加藤家は大店クラスの商人と評価できる。

## ②三代当主の「御相続方」にみる加藤家の信仰の基調

では、四代当主善雄が天保八年（二月八日）に作成した「信心の事及び相続方相伝につき書上」（二・二）を中心に、加藤家の信仰の基調を確認したい。なお、同史料の全文については、本稿末に掲載した翻刻を参照されたい。同史料の性格であるが、冒頭で「当家御先祖分御代々御丹誠之儀<sup>者</sup>勿論、別<sup>而</sup>三代目浄雄居士御相続方荒増子孫へのため左二書印置候」とある。また、末尾には、三代当主・四代当主がともに二七才で家督を譲った先例を記した後、下記のように記している（史料中の括弧内は筆者註、以下同じ）。

（前略）依之拙者義も正直ニ御先祖分之家風相守、浄雄居士被仰聞候通相守候故、諸神仏様御影、御先祖様之陰徳ようこふ（影向）ニて相続いたし、栄光大姉（四代当主母）七十七才ニて御往生御見送り、大勢之子供等も無事ニ養育致、今年六十一才ニて悴廿七才ニ相

成候ニ付、目出度家督相譲り申候、子孫永々右之心得ニて相続為致度あらまし斗り書印置ものなり

南無阿弥陀仏

このように、同史料は、四代当主が父からの家督相続にならって二七歳になった息子に家督を譲るにあたり、子孫に向けて三代当主の「御相続方」、「御先祖分之家風」を伝える目的で作成された一種の家訓といえる。本稿では、とくに「諸神仏様御影」に注目していきたい。

第一条では「万国に勝れたる神国」に生を受けたことに感謝し、「神明の掟」を守ることが第一に掲げる。この「神明の掟」の遵守とは、「心正直に国の法度守」ること、「家業出精」と、「御先祖御父母大切ニ致し、下をあわれみ」、「天照皇太神宮様始め八百万の神々様への御礼」を毎朝神棚にすることとする。商家の家訓で「国の法度」、すなわち幕藩領主の法令の遵守を掲げることは一般的であるが、信仰を前面に出していることが注目される。ここで説かれる神国観は、神棚に「御念仏を申、御拝」とするように、いわゆる本地垂迹説に基づくものであった。その帰依する宗派は、先祖から浄土宗である。法然（円光大師）が建暦二（一二二二）年に没する直前に弟子の求めで書かれたという、浄土宗の基本的な教えとされる「一枚起請文」をよく守り、「六字分明」（南無阿弥陀仏）の念仏を代々唱え続けよ、とする。そして第一条では引き続き、毎月百万遍や年忌法事を務め、毎年積み立てている「法事金」から「諸神諸菩薩」への寄進を分相応に名譽とは関係なく行い、一家や親類にかかわらず「正直」で貧窮の者には分相応に心づけをせよと説いている。「陰徳」や、「名聞ケ問敷」ことを避けるという点に、多くの商家が規範として用いた心学との整合性も認められる点が注目される。

前稿<sup>(21)</sup>で指摘したように、加藤家の勘定帳簿によれば、安政六（一八五九）年段階でも先祖（二代後妻・三代・三代妻・四代）への「法事金」八〇〇両のほか、「積善」五二両が確保されている。四代当主が

定めた加藤家の「家掟書」(文政九(一八二六)年 二二三)にも「神儒仏三道并先祖より之宗旨相守可申事」という項が設けられ、但し書きで「当家宗旨円光大師一枚起請之通信心専一、勿論名聞ケ間敷事一切致間敷候」としている。加藤家の信仰の根本は、浄土宗にあり、かつ陰徳を重視するいうものであった。

つづく第二条では、三代当主の浄土宗への帰依の様子が記されている。三代当主は、二代当主の二人目の後妻貞三を「天誉上人大我和尚」の勧誡を受けさせて、仏門に入れた。また、念仏に励み、「善光寺旅宿」にもたびたび参詣し、竹川町の大和屋が作った「四十八躰之燈籠仏尊像」を「御仏勅」で自宅にしばらく安置するなどして信仰が深まり、甲斐善光寺の住職「性誉上人霊海」を「仏の化身」と信奉するまでに至っている。

性誉は甲斐善光寺の五十世の住職で、宝暦四(一七五四)年に焼失した甲斐善光寺の再建勧進に奔走したとされている。<sup>(24)</sup> 同年に幕府への材木三〇〇本の下賜願は認められたが、翌年の幕府への「本堂建立願」は、寺社奉行への内願の段階で諦めた。そして同六年には、江戸に下向してきた知恩院に、甲斐善光寺は恒例の挨拶と燈籠仏の「御封印改」を受けたが、「極内々之義」として「灯佛七日・十日計御開帳仕、御封印被遊爲被下候様」を願い出て、幕府には届けず、「御府内所々大名・小名并寺院方江入御」し、「内々」の公開を行っている。<sup>(25)</sup> こうした甲斐善光寺の江戸での勧進活動の中で、三代当主の帰依が高まったのであろう。

さらに三代当主は、甲斐善光寺・信州善光寺に参詣して通夜を行っている際に、(おそらく如来から)それぞれ水と蓮花を頂くという「夢」をみて、いっそう信仰心が高まったという(第四条・第五条)。

こうした信心の実践として、先祖供養と供養に用いる仏具の制作、親類・奉公人やそれ以外の人々への「譲り金」などの救済、講への参加や自身による講の設立、甲斐善光寺をはじめとする諸寺院への寄進、があ

げられている。以下、他の史料も合わせて検討していきたい。

### ③先祖供養と他者の救済

まず実践の基本は、先祖供養である。さきの「家掟書」(二二三)に「先祖太切存并精進日仏参可相守事」とあるように、それぞれの精進日には菩提寺に仏参がなされた(六十六)。加藤家の菩提寺は、増上寺の中興開山の観智が開いた増上寺末寺正覚寺の「寮舎」哲相院で、浅草黒船町の正覚寺の境内にあった。正覚寺は境内の榎で作った秋葉大権現像が火事から堂舎を守ったとされたことから、榎寺と呼ばれ、信仰を集めた。哲相院は正保元(一六四四)年草創で、明治一〇年の段階で加藤家は檀家一〇五戸の檀中世話人惣代二人の一人であった。

また、日常の弔いに用いる仏具の制作として、三代当主自身が了典居士(二代当主)の像を小刀で細工して仏壇に安置した件(第一七条)と、貞三法尼(二代当主の二番目の後妻)の画像の下絵を描いて「嵩月」に依頼し、掛軸に仕立てて毎月晦日にかけて回向を吊っている件(第一八条)があげられる。後者の「嵩月」とは、英一蝶の門人で寛政から文政にかけて活動した高嵩月(一七五五―一八三〇年)であろう。<sup>(27)</sup>

さらに、「信心の事及び相続方相伝につき書上」(二一二)には記載されていないが、高野山光明院が発行した二代当主(安永三(一七七四)年)の日牌の証文が二通(一〇一七、追善で一〇二五)、月牌の証文が三代当主(文化二(一八〇五)年 三回忌 一〇一〇)・四代妻(未五月 一〇一三)・四代当主ほか一名(安政六(一八五九)年 二〇一・二二二)など計七通残されており、「操出し御位牌」の代金三〇〇正の請取状も残されていることから(二〇一・二二三)、高野山の光明院に位牌をおいて死者の毎月の供養を依頼したことがうかがわれる。また、「観宗角瑞信士」の追善と「角念元通信士」については、特に四代母が

金剛院に月牌を納めている。<sup>(29)</sup>このほか四代娘ひでが死去した際は、嫁ぎ先の田原屋庄兵衛とともに「施餓鬼祠堂金」として金一五両を重願寺に納めている(一〇一・二七)。同寺はおそらく田原屋の菩提寺であろう。

信仰は知人の救済にも及んだ。「変病」に苦しむ「炭屋久右衛門殿内儀」のため、密かに百万遍百座を行って成仏させたこと(第二〇条)をあげている。また、自身が亡くなる前に「親類・朋友・召仕」へ多くの「譲り金」を与えたことも三代の「善根功德陰徳」の一つとしてあげられているが、縁のある者の救済ということであろう(第二一条)。

#### ④ 講

さらに信心は講や寄進という形で、無縁の者にも及ぶ。まず、講については、「百万遍」の講の設立経緯が第九条で示されている。三代当主は百万遍の功德を諸人にすすめるため、「大珠瓊操札箱」を作って懇意の者三三軒に配ったことから近辺に講ができ、蝦夷三官寺の一つで増上寺末寺である東蝦夷地のウス善光寺の建立時(文化元(一八〇四)年)に寄進したとしている。<sup>(30)</sup>

このほか、第三条によれば、甲州善光寺旅宿相統講や菩提寺である浄土宗の「榎寺寺中哲松院」の「永代施餓鬼講」のほか、神社の講(「伊勢三社并鹿島・香取・船橋・神田・明儀(妙義)山・鎌倉八幡、右太々講、秋葉山鳥居講、不忍弁天堂灯明講」)を設立し、また江戸の祐天寺百万遍には月掛を行い、ほか信州の善光寺旅宿外十一講などに加入し、これらだけに力を注いだ(「掛切」)としている。

このうち、甲州善光寺旅宿相統講は、天保三(一八三二)年に「仏勅窺」の上、方丈に相談して、燈籠仏の別当である光円坊と山内一五庵の相続の手当金として三代当主によって始められたものである。年五〇両ずつ二年間で計一〇〇両を積み立ており、こうした短期間の積金の成立

に、加藤家の集金における熱意がうかがえよう。同五年正月には光円坊と山内一五庵より「庵室大破之庵中共難渋」として、それぞれの庵への「分備」が願われ、受取状が出されている(一〇一・五二)。受取状の宛名には、加藤家とならんで吉田勘左衛門が列記されており、同様に甲斐善光寺の信者で講の立ち上げに加わったと思われる。吉田は、甲斐善光寺関係の他の文書で確認される堀江町一町目の団扇商・茶問屋の伊場屋勘左衛門であろう。<sup>(31)</sup>この講金は、「隠居寺」の整備にも使われた(天保二(一八三一)年 金三〇両 一〇一・五四)。

甲州善光寺旅宿相統講の「旅宿」とは、江戸に設けられた甲斐善光寺のいわば「出張礼拝所」<sup>(32)</sup>であろう。成田山の「旅宿」は、御師・先達などと同じように、江戸の信仰的紐帯の機能を果たし、また直接参詣ができない人々が参詣する場であった。<sup>(33)</sup>甲斐善光寺の旅所も同様の機能を果たし、ここを起点として講金が集められたと考えられる。飯田文弥は、嘉永元(一八四八)年の「灯籠尊御参内御上京之記」に、「同(八月)十三日、江戸旅宿へ例年之通御着興」とあることから、一九世紀には毎年行われていたとみている。<sup>(34)</sup>遅くとも一九世紀には、旅宿は恒常的におかれていたと思われ、<sup>(35)</sup>先述した「内々」の開帳や、たびたび個人や村の「請待」<sup>(36)</sup>によって常陸や武蔵・下総などを回って「結縁」していることから、頻度は不明なもの、江戸で内々に燈籠仏が講員に対して開帳されていたのであろう。なお、前述したように三代当主は、「善光寺旅宿」に度々参詣して信心を深めたとあり(第二条)、天明四(一七八四)年には石像(「信州善光寺尊像一鉢」)を「甲州善光寺旅宿如来前江納置」<sup>(37)</sup>くことを旅宿に願い、認められている。この旅宿が江戸の旅宿であれば、その成立は一八世紀後半に遡ることになる。

天保一三年には、通三丁目横町にあった旅宿を、天保改革における町道場の取締を契機に増上寺の子院端華院に移し、<sup>(38)</sup>慶応三(一八六七)年には、ついに加藤家の菩提寺である哲相院が旅宿となった。左はその際

に哲相院の本寺である正覚寺（榎寺）に出された届け出である（一九一  
一三二）。

#### 差上申規定一札之事

一、燈籠仏旅宿御地中哲相院<sup>江</sup>寓居仕度段、先頃中御内談及候処、御  
随喜被成下候ニ付、公辺<sup>江</sup>奉願上御聞濟之上、無滞今般遷座ニ相  
成、然上<sup>者</sup> 公辺御触達之儀<sup>者</sup>勿論、御寺法堅相守、火之元大切且  
如何敷者決<sup>而</sup>止宿爲致間敷、將又参詣之者之内万一横災・頓死其外  
如何様之儀出来仕候共、少<sup>茂</sup>御苦勞相掛申間鋪、猶向後旅宿ニ付御  
差支之儀御座候ハ、御申間次第早速改革可仕候、爲後証連署一札  
仍<sup>而</sup>如件

慶応三卯年八月

哲相院檀方 世話人

美濃屋権兵衛<sup>印</sup>

同

池田屋利兵衛<sup>印</sup>

本院

哲相院<sup>印</sup>

旅宿院代

海雲<sup>印</sup>

#### 正覚寺御知事中

前書之通り、相違無御座候、已上

甲州善光寺<sup>印</sup>

端裏書に「燈籠佛旅宿ニ付規定書」と記されているように、この文書は  
哲相院の本寺である正覚寺（榎寺）に対して、法の遵守や火の用心、身  
元の怪しい者の止宿の禁止、参詣人が不慮の災難や急死した際の処置等  
を誓約したものである。同年一〇月には加藤家と旅宿院代より正覚寺に、  
本尊前に毎月金二〇〇疋の供金と、宿料として正覚寺の院主へ金一両を  
納めることとし、この金を加藤家が預かって必要な時に渡す、としてい  
る（一九一三三五）。これらはいずれも正文であるが、明治二五年に「旅  
宿引払」にもなつて旅宿あての証文を回収していることから（一九一  
一三四）、これらも同様に回収されたものと考えたい。

また、文政八（一八二五）年には「善光寺蠟燭講集り金」として二〇

両の請取がさきの伊場屋（吉田）勘左衛門より「蠟燭講御世話人中」に  
（二〇一七三三）、同一二年には「女中御花講集り金」として一七両の請  
取が同じく伊場屋より「御花講蠟燭講御世話人中」に出されている（二〇  
一七四五）。この講の場合、金子自体は伊場屋が預かり、証文は講の世話  
人である加藤家が預かるという方式をとっていた。また、加藤家も「日  
本橋講中」などの寄進金三〇二両余を預かっており、利足も記されてい  
ることから（一九一三三三）、祠堂金のように、江戸での利殖を任せら  
れていたと推測される。近代に入つても、明治七年に「頼母子講御助成」  
として旅宿に加藤家が金一〇円を納め（一三一九）、同年に「灯明講」  
の講金二〇円を預かつて利殖し、明治一三年には「東京相統講中」が「山  
門家根修繕」で甲斐善光寺に金一〇〇円を寄付している（一三三三）。

このほかの講では、文化六（一八〇九）年七月に、祐天寺と講の世話  
人より「月掛講金」として金四兩二歩の請取状が確認でき、「各之施主  
之意願常時勤行、且毎年七月十六日施餓鬼会修行、先祖代々并永世現当  
両益之回願」を約束されている（二〇一三三）。

さらに、「信心の事及び相統方相伝につき書上」（二二二）には記載  
されていないが、嵯峨清涼寺について文政二（一八一九）年に「相統講」  
へ金五両を納め、「御開帳鑑札 嵯峨釈尊永代講」の鑑札を所有してい  
た（二二二）。また、天保六（一八三五）年には、増上寺の宝徒より、「昇  
進講」から金二〇両の借用書が出されており（二三一三三）、増上寺に  
かわる講に参加していたことが知られる。

### ⑤ 加藤家による寄進

#### （一） 甲斐善光寺

最後に寄進をみていきたい。寄進でもやはり目立つのが甲斐善光寺





図3 鎧塚

である。最初の寄進は、宝暦四（一七五四）年の火災後の堂宇の再建の時期に行われている（二〇一三）。御堂の東山林（第七条 寛政三（一七九一）年 酒折村の山林<sup>(39)</sup>）、その山麓の「五輪塔型石塔」（第八条、本堂東の「御拝一式」（第九条、「御堂」内の「五輪法経印塔」（第一〇条）、子孫の子育てのためとして寄進した「御堂」の「如意輪観音之像」（第一条）、御堂への永代爲百万遍料（第二条）の六件に及ぶ。

こうした寄進は、「霊夢」を契機とする場合があった。山麓の五輪法塔には、先祖代々の法名を記し、塔の下には「霊夢」でみた質流れの「加藤某の着用」の「鎧一領」を埋めたという。この塔は金堂の北東約四〇〇メートルに現存する「鎧塚」（図3）で、鎧の伝承によれば、加藤家が売却しても三度も手元に戻ってきたという質流れの緋緘の鎧を、性誉に享和元（一八〇一）年に相談した上で埋めたとされている。また、御堂内の五輪法経印塔の寄進は、二代後妻の貞三が極楽浄土で往生するためだという「霊夢」によるもので、三部経を納めている。このほか、

安政三（一八五六）年には、江戸の旅館を通じて「宗祖円光大師正毫」の「御名号一幅」を納めている（一九六二）。

永代爲百万遍料は、別稿で触れたように、寛政八（一七九六）年より神田蠟燭町の所持屋敷での町屋敷経営の上り高によって毎年金一八両を奉納したものである。同年の金堂の竣工にちなんだ始められたと思われる。加藤家は親類に沾券状を預け、親類一同の連印で今後町屋敷を売却しない旨の証文を善光寺住職の性誉に提出している（二〇一八・三・四）。善光寺では性誉ほか役僧がこれを受け、「毎日於当山 本尊前日々百万遍修行并今般納候宝塔前二おるて回顧愍重之義永世怠慢無之申渡」と加藤家に伝えていたことから、本尊前で阿弥陀の名号を七日間ないし一〇日間に百万回唱える百万遍修行とともに、加藤家が奉納した五輪法経印塔で浄土への往生を祈る行為が寄進に対する勤めに含まれていたことがうかがわれる。また、金一八両のうち二両を「本尊并燈籠仏及宝塔前日々供物料」、一両二分を「導師布施料」、一四両二分を「山内十五庵出勤不出勤共二割出布施料」にあてるとしている（二〇一八・二）。ただし、同町屋敷は度々類焼したため、相談の上で売り払い、その代金から毎年金一八両を永代奉納することとなった（二一二）。なお、善光寺からの書状には、「兼御預り金蠟燭町御払被下候五百金并二此度割付之百金興一ツニ合して六百両、宜預ケ口有之候間、其方江貸付候て可有由」という案が出されており、売却代金が五〇〇両で、他の寄進金一〇〇両と合わせて、美濃屋に運用を任せることが検討されたことがうかがえる。<sup>(43)</sup>このうち、明治六年に善光寺が朱印地であった地所を購入する資金が必要となったため、金一〇〇両を納めて「納メ切」となった（二〇一八・一）。実に寄進は七七年も続けられたのである。

さらに、「常念仏祠堂金」として、文政年間以降、安政四（一八五七）年まで加藤家は自身の寄進と合わせて金三〇〇両を運用した（一九一二・一三）。

右金子此常念仏祠堂金之義<sup>者</sup>性誓上人御代之時分、本堂再建入用多分二付、奉伺御仏勅之上、普請入用二御遣被成候二付、其後一同心掛、文政年中旅宿受納金多分有之二付、右之内今追々積立置調達之上、金三百兩・年四歩割合にて預り置申候、利足毎年御出途之時分御渡し申候、證文方丈様御交代之時々書替申候、証人先年松屋新兵衛、其後伊場屋勘左衛門、此度山形屋次郎右衛門二致候、然ル処当御前浄誓様昨年御出府之節御相談有之、大切之金子故 御国許御公辺御役筋へ尊霊様御供養料として永代預け置申度ト御相談有之候、手前方ニても忘父事<sup>⑤</sup>も年来心配致居、慥成預け口有之候ハ、預替申度、度々奉伺候へ共御差図無之其儘ニ致置候、此度之所も私存意ニ<sup>者</sup>御返答致兼候、御仏勅次第可仕旨申上候、依之御出途前御祈願之上立会ニて以御圖奉伺候処、右宜敷御仏勅二付、当正月ニ至候ハ、何時ニても返金可致趣御受申候、道中飛脚心遣二付、則三度ニ仁朱金ニて相渡申候、證文受取別判取小帳面へ印形取置申候、依之右元金不残相渡し相済申候以上

安政四丁巳年三月廿九日

左は、請取の裏書・裏判が押された加藤家の甲斐善光寺宛の金三〇〇兩の借金証文<sup>④</sup>（一九一二五・一二）に付された文書（一九一二五・一三）であるから、宛先は甲斐善光寺である。起立講の世話人も借金証文の宛名にみられるが、三〇〇兩は加藤家自身の寄進金と旅宿の受納金を合わせたものだったと推測される<sup>⑤</sup>。この三〇〇兩を加藤家が運用し、毎年利足を渡していたが、「御仏勅」にしたがつて、寺側の願い出を受け入れ、三回に分けて元金を返却することとなったのである。

しかし、加藤家が預かっていた金子はこの三〇〇兩にとどまらなかった。安政六年の勘定帳簿「金銀控」でも、「内預り」の中に「甲州善光寺百万遍祠堂」五五〇兩、「同旅宿相続講金」八〇〇兩余、「同所非常勤其外口々」一九五兩余が計上されている<sup>⑥</sup>。加藤家にとって、寄進金は信

仰の証とともに、いわば祠堂金として運用する資金だったのである。ただし、さきの安政四年の借金証文の添付文書で父の代から加藤家の方でも預け先を変えたかった（「預替」という文言を信じれば、利殖に励むことはあっても、積極的に自身の商売の拡大に利用するという意識はさほど強くなかったと思われる）。

また、年不詳であるが、善光寺に参詣した際に甚左衛門町に所持する町屋敷を売却し、「再建立并上棟用金」として五〇〇兩余を寄進している（一四一四）。この町屋敷は明和四（一七六七）年に四八〇兩で取得したものであった（一九一八四・一九一八五）<sup>⑦</sup>。

このほか、多数の寄進が確認できる。高額のものや、年や目的が明確なものについて、以下みていきたい。文政五（一八二二）年には、「性誓上人爲供養扶助」として寄進して預かっていた金一〇〇兩を、善光寺に近い幕領の国玉村・和戸村への貸付金として渡した（一三二二〇）。また、同九年には「再建寄付金」として「永代百万遍料」金一二兩式歩を寄進し（一〇一三一）、翌年には伊場屋（吉田）・中源の寄付金と合わせた「月々御念仏料祠堂金」四〇兩として伊場屋が預かっており（二〇一七・一四）、おそらく伊場屋が運用を行っただと思われる。同一〇年八月には金五〇兩を「毎月六日家内安全百万遍資糧」として「寄付」し、この金子は「西向拝再建」の資金にあてられている（二〇一五）。嘉永五（一八五二）年には、三代当主の遺言によって積み立ててきた甲斐善光寺の一六庵（燈籠仏別当の光円庵を含む）の再建費用三三五兩を寄進し、またこれに先行して五庵に二五兩ずつ、また一六庵に一〇兩ずつ寄進していたことから、一六庵は「貴家様御先祖御菩提且<sup>者</sup>御家門繁栄之御位牌各庵ニ御安置申上、御代々御法名過去帳ニ相記、朝暮無怠慢御回顧可申上」としている（二〇一三）。安政四（一八五七）年には、旅宿の普請のため金二〇兩を寄進した（二〇一七）。

さらに、年不詳ではあるが、甲斐善光寺の僧侶良嚴の葬式に際して、

伊場屋（吉田）・辰沢治郎右衛門（山形屋か）とともに金一〇両をおさめている（一三・一二）。家としての寄進やその運用も明治期まで続き、明治一一年には住職交代の扶助金として五円を（一九・六五）、明治二〇年には「本堂総修繕」の喜捨として一五円を納めた（一三・四〇）。同二五年には預かっていた一八円を、同二六年には同一三年三月から二六年四月まで駅通局に預けた六〇円と利子を合わせた七〇円餘を参詣の際に納めているが（一九・四二・三）、これは、先述した哲相院の旅宿の引払いに伴うものであろう。

さらに、僧侶個人や庵にたびたび金を貸している。多くの証文が残されていることから、これらは回収をあてにしない貸金だったと考えられる<sup>(48)</sup>。こうした加藤家からの寄進や借金の請取状には、しばしば旅宿の「惣代」の僧侶が名を連ねており、旅宿が甲斐善光寺の資金調達機能を果たしていたこともうかがえる。

## （2）菩提寺と浄土宗寺院

菩提寺である哲相院には、宝経印塔を建てて「先年奉安置四拾八牀燈籠仏」を納め、重安（三代養子）の菩提を弔っている（第一四条）。この四八体の燈籠仏とは、第二条にみえた竹川町の大和屋作成のものである。

安政大地震後の安政二（一八五五）年一月には、この塔と燈籠仏の修復を行っている（一九・一四・一六）。その際の記載から、塔には、「正面 三界万霊 南之方 永代施餓鬼大会 北之方 講中造立之後 之方 維時 寛政八丙辰年四月仏誕生日 哲相院十三主諒蒼彈道代」と記されており、寛政八（一七九六）年の造立であったことがわかる。このほか四面に久保寺喜三郎をはじめ計九〇人の商人が名を刻んでいた。このうち、美濃屋号の者は一七名で、ほか親族の名がみられた<sup>(49)</sup>。また、燈籠仏については、四八体のうち「感夢示現尊像」を、鋳物師の西村和

泉（神田鎌倉町壱丁目）に依頼し、仕様などもふくめて仏勅にしたがい、修復している<sup>(50)</sup>。修復中には、「御伺」して「御仏勅」を得た上で、宝塔を借り、自宅の奥土蔵の仏壇で「開帳」し、家族と奉公人で「拝礼」した。そして、翌日返却の上、一ヶ月後に宝塔に「入仏」となった（四・四）。「開帳」の日程も「拝礼」できる人選もすべて「御仏勅」によるものとしている。宝塔の中にあつたのは、「燈籠仏尊ト烟魔王」の二体と「浄土三部経・大乘妙典法花経等」であつた。このうち、二体は「燈籠仏尊ハ乍恐黄金之様ニ見ヘ、煙魔王ハ右ニ巻物、左ニ笏ヲ持し給ふ尊様にて、鋳物之様ニ黒く相見ヘ、御後ニ浄雄作ト有之候由承り候」というもので、閻魔は三代当主が作成したという伝承があつたことが知られる。

また、信州善光寺には祠堂金を奉納して、二代当主の毎年の命日での菩提の弔いを頼み（第一三条、一〇・四五 享和三（一八〇三）年）、弘化四（一八四七）年には手伝料金二〇〇疋（一九・一七・二二）、また仁王門再建手伝金一〇〇疋・二分一朱を納めている（年不詳子年七月一九・一七・二二）。

さらに、浄土宗の関東十八檀林の一つである本所靈山寺には「祠堂」（位牌堂か）を奉納して、「先祖代々菩提位牌」を納めている（第一六条）。また年未詳だが、「万人講」として金五〇〇疋を納めて「永世回向」を行つてもらい（一九・一七・二〇）、享和元（一八〇一）年には、同寺を通じて「叡山青龍寺大師前」に「常待料」として金五〇両を「寄付」している（一〇・四八）。青龍寺は天台宗寺院であるが、法然が修行をした場（黒谷）と伝えられていたからであろう。

越後高田の善導寺には、金五両を奉納している。その内訳は四代当主の「護摩経四巻料」、妻の「護念経壹巻料」と思われる<sup>(51)</sup>。寄進との前後関係は不明だが、享和三（一八〇三）年の三代当主の臨終に際し、江戸に来ていた「越後高田善導寺海誉上人」を招いて百万遍を催しており（二二条）、同寺への信仰がうかがわれる。

### (3) 他宗派の寺院・神社

加藤家では、こうした信心する浄土宗のほか、他宗派の寺院にも寄進している。駒形にあった多田薬師（天台宗 東江寺）は「信州善光寺旅宿」で、ある人が仏師野村源光に作らせた「本田善光之像」を見たところ、「眼中玉眼二無之」状態だったため、注文主に内緒で仏師に頼んで「玉眼」を入れてもらっている（第二一条<sup>(52)</sup>）。これは浄土宗信仰にかかわる内々の寄進といえるだろう。

浄土真宗の浅草称念寺には、三代養女の菩提を弔うため祠堂を奉納している（第一五条）。同寺には、二代後妻が没した寛政二二（一八〇〇）年にも「永代祥月読経施入金」五両を実家とともに納めている（二〇一二）。両者の実家はいずれも伊勢屋（松本）安右衛門であることから（本稿末系図参照）、称念寺はおそらく同家の菩提寺であろう。

また、浅草観音の「本堂」に「五輪塔之額」を奉納している（第六条 図4 四一二）。この五輪塔を描いた高さ六尺五寸の塗物の額は、三代当主の「御心願」で天明四（一七八四）年に「本堂南向」に納めたもので、納めた後は、毎年正月・七月に額施主堂に金五〇〇疋、堂番中に金五疋ずつ「付届」していた（四一二）。額には厨子があり、「心願書物」が入れられていた。その後、享和三（一八〇三）年に浅草観音で信州善光寺開帳があり、三代当主が日参していたところ、心願して南向きに納めていた額が、西向に変わっていたため、寿命は今年限りと語り、実際に同年に死去したとしている。さらに、天保一一（一八四〇）年に、浅草観音の修復に<sup>(54)</sup>合わせてこの額をいったん取り下げて、先の仏師野村源光に金五両で依頼して修復し、同年に浅草観音へ戻している（四一二）。また、文政一〇（一八二七）年七月には「常説誦法華経料」として金一〇〇疋を納め（一〇一二三）、慶応三年には「観音様御普請勸化御菓子講中」に三年分として、金三〇〇疋を納めている<sup>(56)</sup>。

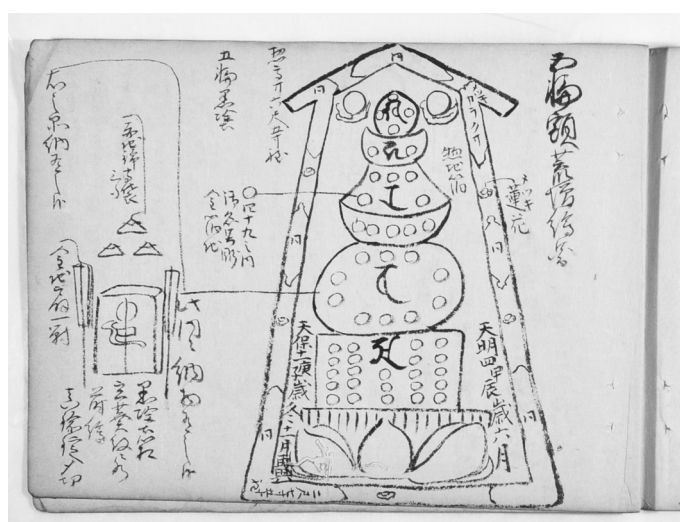


図4 浅草観音に寄進した「五輪塔之額」  
(国立歴史民俗博物館蔵美濃屋加藤家文書 H-1706-4-2  
「(冥加金上納すべく達・上納覚・浅草寺観音堂修復後開帳への奉納金覚など)」)

このほか、相州大山の御師で別所町左の大滝の瀧守であった瀧淵坊に<sup>(57)</sup>寄付を行い、講に入っていた秋葉寺については金一〇〇疋を初穂として納めている（末年 一九一七一二三）。

以上の寄進の多くは先祖供養も目的としているが、哲相院の宝経印塔について「一人之建立者名聞故、諸人寄進相願、名前彫付け有之」とあり、実際に九〇人の名が刻まれたように、基本方針の通り、あくまで目立たず、先祖供養も諸人への救済の中で果たそうとしていることがうかがわれる。甲斐善光寺の永代爲百万遍料も同様の発想に基づくものであろう。

## ⑥ 加藤家と「霊夢」・「御告」・「御仏勅」

### (1) 寄進

こうした一連の加藤家の寄進のうち、重要な決定にあたっては「御告」「霊夢」「御仏勅」にしたがったものとされている。燈籠仏への信仰が深まったのは、竹川町の大和屋が作った「四十八躰之燈籠仏尊像」を「御仏勅」で自宅にしばらく安置したためであり、天保三（一八三二）年にはじめた甲州善光寺旅宿相続講も「仏勅窺」によるもので、文政年間にはじめた「常念仏祠堂金」の寄進や預かった三〇〇両の返金も「御仏勅」にしたがった結果とされる。安政二（一八五五）年の燈籠仏の修復方法も仏勅を仰いだ上で、決定している。

こうした「御仏勅」を仰ぐ場合には、「常念仏祠堂金」の運用方法でみたように「御祈願之上立会にて以御圖奉伺」と、圖を行った。たとえば左は、先述した安政二年の燈籠仏の修復の仕様や、加藤家の自宅での燈籠仏の披露についての伺いと結果である（朱書部分は傍線で示した）。

御厨子拵方寸法西村心得之通り申付宜敷御座候哉 吉

右二取斗吉

厨子裏<sup>江</sup>由来書先々之通り印置宜候哉 吉

右文字不分処有之、分り候丈ヶにて宜候哉

右二取斗 吉

当年号再建印可申哉

右二取斗 吉 十一月吉

細工人西村和泉卜彫付可申哉

右二取斗 吉

矢張手前名前印不申方宜敷候哉

比度ハ名前印 吉

通油町美濃屋権兵衛卜印吉

御燈籠之中御厨子御袋致し宜候哉

右拵ニテ吉、御袋古キ分差上可申候

金襴鈍子

(一九一四一三)

真鍮 吉

銅めつき凶

御紋 立葵付たる吉

西村和泉 吉

石工 宿 半七 吉

寺 七右衛門

宿<sup>江</sup>御請待 来月幾日 九日吉

家内之者之外 うめ ミつ セん 新兵衛 源七 五郎兵衛

善六

右へ爲拜宜敷御告ニ御座候、以上

(一九一四一六)

右の場合、圖の作成や実施については不詳であるが、三〇〇両の返金は善光寺が立会ったように、宗教者が担ったと思われる。甲斐善光寺の燈籠仏の旅宿である増上寺の子院端華院で、安政大地震を被災した後、その修復は下記のような経緯で行われている（四一四）。

芝御山内甲州旅宿之義、先達<sup>而</sup>今御普請又<sup>者</sup>諸々寺院へ御引移り之義御窺申上候所、御告無之所、今年甲州方丈様浄誉上人江戸表御滞留中御祈念有之、御窺有之候所、端華院門内右之方へ普請御差

図有之候ニ付、諸講中<sup>江</sup>吹聴ニ及び、端華院方へも懸合及、御絵図面等出来、弥明二月上旬より普請ニ取懸り可申御告ニ有之、大工宗兵衛へ被申付、仍之御庭先<sup>江</sup>普請金寄進連名札懸出来、吹聴札受書出来、内にて金廿兩之寄進、其外寄進連名略之、午(安政五年)二月八日手斧始メ、四月廿八日建前、四月十九日棟上規式、八月七日御移迎

普請か他の寺院を探すかという大方針について「御告」が無く、甲斐善光寺の方丈が江戸滞在中に「御窺」をして「御告」を得たことから、普請がすすめられたのであった。

## (2) 家

「御告」・「霊夢」・「御仏勅」は、こうした宗教行為のみならず、加藤家の人々の人生をも左右した。

まず、人生儀礼の日時の決定である(四・四・六)。五代当主次男の卯兵衛の場合、天保一(一八四〇)年六月二日に「七夜名付」として、「御仏勅」の上で竹三郎と名付けられ、嘉永七(一八五四)年十一月一日に「吉日二付、御仏勅之上、半元服」として髪置祝いを兼ねた祝いが催された。同月二四日には、「御仏勅之上、実印被下」、父の名乗である延利の名前を一字ずつ分けて、六代当主が「延栄 裏印寿」、弟が「利長 裏印竹」となった。印鑑の制作は四日市の松本屋市右衛門に依頼した。さらに翌安政二(一八五五)年五月一日に「吉日二付、御仏勅ニ仍テ元服いたし候」となり、「替鞆脇差」を譲られた。そして、卯兵衛の誕生日である安政四年六月一日には、「御仏勅」の上で、五代当主長男(後の六代当主)が「権重郎事松兵衛」、次男が「竹三郎事卯兵衛」と改名した。「松兵衛ハ御先祖浄雄様幼名長松、善雄様幼名卯ノ松、父幼名松次郎、其松也、卯兵衛之名は祖父善雄様中年御名、又父中年之御名也」であった。

また、安政二年五月一日には、四代当主が安政大地震後の避難先で没した。この際には、「御仏勅之上」で葬儀の執行を一六日と定めている(四・四・六)。

さらに、一族で問題を起こした者の処分にも「御仏勅」が用いられた(四・四)。天保一〇(一八三九)年生の別家五郎兵衛の弟喜太郎は、四代当主娘の次男にあたる加藤家の縁戚であった(本稿末系図参照)。最初は四代当主の次男である堺屋新兵衛に「三才より奉公したが、元服した安政三年に家出し、本所の吉原仮宅にいたところを連れ戻して他の商人に預けるが家出、さらに別の商人に奉公させるがまた家出した。そこで母である四代当主娘と兄である五郎兵衛当主が勘当を申し入れてきたが、加藤家では今一度意見を加えた上で「奉公人同前ニ差置」た。しかし、約二ヶ月で欠落し、他の商人に預けたがこれもまた二度家出して「浅草広小路引手茶屋」にいるところを見つけ、連れ戻した。翌日には甲斐善光寺旅宿に預け、その翌日に甲州に立立させ、甲斐善光寺内の浄蓮庵で二ヶ月ほど世話になった後、安政四年六月に江戸に戻した。しかし、一〇月に不始末があり、「持逃欠落」をして戻って来なかったため、善光寺の旅宿惣代の僧侶も同席の上で、「十九日各一同相談、廿三日如来様にて御祈願之上、御圖ヲ以、久離ニ決定」し、翌二月二四日に町奉行所に久離勘当届けが提出されたのである。

このほか、コレラが流行した安政五年八月には、町触で奨励された芳香散の効能を信じられなかったのか、「御仏勂」を得て家内中で一〇日ほど用いている(四・四)。

## (3) 経営

さらに、実際の経営においても「御告」・「霊夢」・「御仏勂」は判断基準となった。

安政四年には、出府してきた京都の大黒屋徳兵衛が、「但馬七味(美)

郡高井田中庄右衛門製方之瘡毒之藥竝乍治散」の取次を依頼してきたため、「御窺申上候所、御仏勅有之」と仏勅があったことから、取次を開始し、中元にあたる七月一五日に葉の看板二枚を店の前にかけることとなった(四一四)。

奉公人の雇用にあたっても、「御仏勅」が機能した。安政三(一八五六)年九月には、「下男嘉兵衛相応之由、御仏勅二付抱へる」とある(六一六)。

また、明治八年には、通油町が火災に見舞われ、建物が焼失後、地主炭屋より返地の要請があった(八一三)。加藤家はこれをいったん断るが、「如来様に奉伺候処」、新大坂町七番地へ「転地可致御告」があった。そこで、通油町内の「醒井や殿」に仲介してもらい、すでに居住していた者から敷地を譲ってもらったのである。間口二間半・奥行九間の敷地に間口二間・奥行二間半の土蔵と、「前々類焼後飯家さしかけ見せ」がある状態であった。さらに、通油町にあった土蔵三ヶ所も「御告」に従って、地主炭屋に譲っている。転居先は通油町に比べて有利な地ではなかったが、選地にあたって「御告」が重視されたのである。

#### (4) 開帳・参詣

最後に注目したいのは、さまざまな神仏への参詣や、開帳への参加である。先述したように、三代当主は、亡くなる年の春に浅草観音の信州善光寺開帳に「日参」しているが、この開帳の訪問を「善根功德陰徳」の一つとしている(二一二 第二二条)。加藤家にとって、寺社や出開帳の訪問は、本稿でみてきたような深い信心の実践なのである。

六代目弟の卯兵衛の場合(六一六)、安政三(一八五六)年の元日は「大晦日夜明頃より宅出」で、浅草観音、「太神宮」、「石清水八幡宮」別当大護院(現蔵前神社)、「成田山不同明王」○浅間虚空蔵様江ノ嶋弁天・弘法大師 八十八ヶ所之内」を廻っている。このほか、同年正月から六月までの「神仏参詣大略」によれば、主な参詣先としてあげられた

のは、浅草観音が三回(元日・五月一六日・六月一八日)、蔵前・石清水八幡宮が三回(元日、一月二八日、六月二八日)、川崎大師が一回(一月一九日)、「両大師」が三回(一月・四月の各晦日)、芝神明宮(一月三日)、「如来様」(芝の如来寺)三回(一月三日・一九日・六月二〇日)、水天宮(二月五日・四月五日)、翁稲荷(二月四日)、「護国院七万日回向」(三月晦日)、「太神宮」・「新川太神宮」が各一回(元日・一月四日)、「成田山不動明王開帳」(参詣日は計五日)<sup>(39)</sup>、本所の「弥勒寺薬師開帳」(三月二四日)、「六阿弥陀」詣(二月一三日)、「八十八所詣」(三月二六日「ユシマ・本郷・王子辺・谷中・浅草・本所・深川」であった。このうち、「六阿弥陀」は「六度目也」、成田不動の開帳も「二下参詣」七十五度」としている。寄進と同様に、寺院に限っても真言宗など多様な宗派が対象になっている。

さらに、彼が遺した幕末の記録(六一六)によれば、安政三年七月一日より翌年五月九日までの三二九日間で、卯兵衛が菩提寺以外の寺社に訪れた日は六六日にのぼる。単純計算すればおよそ四・五日に一度は寺社を訪れていることになる。その詳細は後稿に期したいが、注目したいのは、寺社を訪れた際は「参詣」と記し、参詣できなかった場合に「外拝」としている点である。六六日のうち、安政四(一八五八)年四月九日から一三日の五日間は成田山への参詣の旅であったが、それは「御仏勅之上」で実践されたものであった(六一一七)。

加藤家にとって、参詣は単なる名所めぐりや物見遊山ではなかったのである。

#### おわりに

本稿では、美濃屋加藤家を事例に、江戸住商人の店の信仰を検討してきた。明らかとなったのは、以下の点である。

一、信仰の基調は浄土宗であり、「陰徳」を積んで浄土に旅立つことに目的があった。そのため、自身の家の先祖供養を行うとともに他者を救済し、さまざまな講を組織し、また家としても寄進を行ってきた。

「陰徳」や、「名聞ヶ間敷」ことを避けるという行為に、多くの商家が規範として用いた心学との整合性も認められる点が注目される。

二、とくに信仰の対象となったのは、甲斐善光寺と菩提寺の哲相院である。甲斐善光寺については、宝暦年間の火災後の再建にあたって莫大な寄進を行い、江戸の旅宿を通じてその後も寄進を続けた。また、哲相院については先祖供養のみならず、最終的には甲斐善光寺の江戸の旅宿を設けている。このほか、信州善光寺、高田善導寺、江戸の十八檀林の一つである本所霊山寺、嵯峨清涼寺といった有力な浄土宗寺院にも寄進が及んだ。

三、浄土宗寺院のほか、高野山での先祖供養や、浅草観音への寄進など、信仰は他宗派の寺院、神社にも及んだ。

四、質屋も経営の一つの柱であった加藤家の場合、甲斐善光寺からの預り金をいわゆる寺社の祠堂金と同質のものとみれば、寄進も商売と無関係ではない。ただし、帳簿上では項目を分けており、寺院の方で良い貸付先があればすぐに返金する、という本稿でみた加藤家の方針からみて、その利殖は信仰の実践だったととらえたい。

五、こうした信仰にもとづき、加藤家では家族の人生儀礼のみならず、経営においても判断基準として「霊夢」や「御告」を用い、さらには「御仏勅」を求めた。「御仏勅」という方法がどのようにして成立したかも不詳だが、甲斐善光寺に三代当主が帰依する中で形成された可能性が高い。また、その信心の実際は判断できないが、少なくとも家の成員の合意形成において、納得する手段として重要な役割を果たしたのである。

六、加藤家のような大店の場合、非日常的に行われる参詣や、開帳への

参加も、こうした信仰と次元を異にするものではなかった。その参加にあたっては、「御仏勅」が働いたのであり、加藤家の信仰の一角を形成したのである。

なお、他国住商人も江戸において、奉公中に死亡した者のために菩提寺を持ち、また三井家が三囲神社を信仰し、寺院経営の悪化に伴って三井家が寺院経営において一定の権限を持つなど、江戸の寺社との関係を形成した<sup>(6)</sup>。しかし、江戸の寺社との関係がこのように江戸店の経営や生活を左右するには至らなかったと思われる。ただし、加藤家で確認できた「御仏勅」のありようが、江戸住商人や、国元における他国住商人について一般化しうるのかは、今後の検討課題としたい。

また、本稿では、家としての信仰に注目し、個人レベルの信仰には触れなかった。この点では、短期間ではあるが、五代次男卯兵衛の幕末の日記が若干遺されており、個人の生活の中での仕事、信仰、歌舞伎鑑賞、蔵書等の総体を明らかにすることができる。その分析は、稿をあらためて行う予定である。

# 註

- (1) 高橋陽一「近世旅行史の研究」(清文堂、二〇一六年、一九頁)、原淳一郎「近世寺社参詣の研究」(思文閣出版、二〇〇七年、第七章) ほか。
- (2) 以下の記述は、とくに断らない限り、石川博「江戸文化と『燈籠仏』」(吉原浩人編『燈籠仏』の研究 至文堂、二〇〇〇年)、『山梨県史 通史編四』(二〇〇七年)による。
- (3) 「善光寺記録」一(甲斐善光寺文書 東洋文化出版、一九八六年、四九頁)。
- (4) 前掲『燈籠仏』の研究、二〇七頁。
- (5) 同前(前掲「甲斐善光寺文書」、二四頁)。順庵庵は、甲斐善光寺の一五庵(後述)の一つである。本多家の「阿弥陀」「善光寺如来」が一〇月一四日に公開されていたことは、「遊歴雑記」等の随筆で確認できる(岩淵「武家屋敷の神仏公開と都市社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三集、二〇〇三年、表一)。
- (6) 嚆矢としては、田中秀作「徳川時代近江商人の信仰に就いて」(彦根高等商業学校調査課、一九三九年)がある。



- (7) 内藤莞爾「宗教と経済倫理―浄土真宗と近江商人」(『日本の宗教と社会』御茶の水書房、一九七八年、初出は一九四一年)。
- (8) ベラー「日本近代化と宗教倫理」未来社、一九六六年。
- (9) 芹川博通「日本の近代化と宗教倫理―近世近江商人論―」多賀出版、一九九七年。
- (10) たとえば、飯田友子「近世上方商人の仏教信仰」〔密教学〕四二、二〇〇六年など。
- (11) 岩淵「江戸住大商人の肖像」(『新しい近世史』第三卷、新人物往来社、一九九六年)、同「江戸の御用菓子屋・金沢屋三右衛門―武家の消費と上菓子屋の成長」(『和菓子』一六、二〇〇九年)、同「藩邸」『伝統都市3 インフラ』(東京大学出版会、二〇一〇年)、同「江戸・東京の酒・醤油流通―生産者から消費者へ」(『醤油醸造業と地域の工業化』慶應義塾大学出版会、二〇一六年)、本稿でとりあげる加藤家を分析した同「大店」と町」〔学習院女子大学紀要〕二一、二〇一九年・同「大店」〔シリーズ三都 江戸巻〕、東京大学出版会、二〇一九年。
- (12) 市川寛明「江戸における人宿商人の家業構成について―米屋田中家を事例に」〔東京都江戸東京博物館研究報告〕第八号、二〇〇二年)、滝口正哉ほか「ある商家の軌跡」(千代田区教育委員会、二〇〇六年)、岡崎寛徳「江戸山の手の質屋伊勢屋長兵衛と幕府・大名」〔大倉山論集〕第六四輯、二〇一八年)。
- (13) 西山松之助「江戸の町名主斎藤月岑」〔江戸町人の研究〕第四卷、吉川弘文館、一九七五年)ほか。
- (14) 前掲原淳一郎「近世寺社参詣の研究」。
- (15) 前掲高橋陽一「近世旅行史の研究」。
- (16) 新城常三「新稿社参詣の社会经济的研究」(塙書房、一九八二年)。
- (17) 前掲岩淵「江戸住大商人の肖像」註63。
- (18) 高橋陽一は、前掲原書の書評の中で、澤博勝らの宗教社会史に学びながら、「日常での人々の宗教との交わりが背景となって参詣行動が誘発される」可能性を指摘し、旅・参詣の研究において地域の日常的な文化・社会関係を検討する必要性を説いているが(高橋陽一「書評 原淳一郎著『近世寺社参詣の研究』」〔民衆史研究〕七六、二〇〇八年)、家レベルでも同様であろう。
- (19) 前掲岩淵「大店」と町」、同「大店」。
- (20) 七一の一の挿入文書(明治三十九年八月三日の領収書)に「牛込岩戸町二十一番地加藤様」とある。
- (21) 前掲同「大店」と町」、同「大店」。
- (22) 一一〇九〜一一七八二年。山城国八幡正法寺二世となるが、晩年は増上寺四六世定月との縁もあり、江戸に滞在することが多かったという(新纂浄土宗大事典 <http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E5%AD%A7%E6%88%91> 二〇一九年六月二三日閲覧)。
- (23) 阿弥陀が法蔵比丘として修行していた時に立てた四十八の誓願「四十八願にちなんだものであらう」。
- (24) 「善光寺歴代譜」(前掲「甲斐善光寺文書」、「甲斐善光寺の指定文化財」<https://kaizenkoji.or.jp/4/index.html>) 二〇一九年六月二三日閲覧)。
- (25) 「善光寺記録」四(前掲「甲斐善光寺文書」一〇八〜一二三頁)。三月一日より五月五日まで、新発田藩邸や福山藩邸などをめぐっている。こうした開帳は限定的なものであったが、宿寺で日中勤行中に開帳しているように、実際には一般にも開かれていた。
- (26) 以下の記述は、『御府内寺社備考』、『浄土宗明細簿(旧浅草区Ⅱ・旧下谷区)』(台東区教育委員会、一九九二年)による。なお、後者によれば、哲相院は大正八(一九一九)年に正覚寺に合併し、廃寺となった。
- (27) 『増訂武江年表』二、平凡社、一九六八年、八二頁。
- (28) 安永四(一七七五)年の「伊勢屋安右衛門タメ」(二〇一八)、天明二(一七八二)年の三代養女(伊勢屋安右衛門娘 三回忌 一〇一七)、文化二(一八〇五)年の別家善六宛での「誘譽贈語信士」(一〇一九、ほかに不詳で「栄寛淨久信士」(一〇九九)である。なお、明治三十五年には同じく高野山の清浄心院より三分分の月牌証文を受け取っているが(一〇一四)、光明院から変更になった理由是不明である。
- (29) 文化五(一八〇八)年六月(二〇一〇一〜三)。包紙(二〇一〇一)に「此二靈金剛院納め之分」とされている。
- (30) 「但しくり札名号」者檀林方之御筆」とあり、操札には関東十八檀林の僧侶の手で阿弥陀が記されていた。三官寺については、谷本晃久「近世蝦夷島への布教の特質」(『歴史と地理』一二七、二〇〇九年)、馬場正裕「蝦夷三官寺の研究」(『史料流』四一、二〇〇四年)等を参照。
- (31) 嘉永元(一八四八)年の「借用申金子之事(金五〇兩借用につき)」(一〇一〜五七)と「十組茶問屋株帳」(東京大学経済学部資料室蔵白木屋文書)の印鑑が一致することから確定した。本店と同じ場所営業していた親類の伊場屋仙三郎は(一〇一五六)、地本草紙問屋で束団扇を商っていたことで知られ、現在も「株式会社伊場仙」として営業が続けている。伊場仙の現当主は吉田姓である(<http://www.ibasen.co.jp/profile.html>)。二〇一九年七月二六日閲覧)。なお、伊場屋勘左衛門家は、嘉永期に経営が不振となつたのか、町屋敷を抵当に加藤家より借金をしている(二〇一六、三八、五七)。
- (32) 『新修成田山史』、大本堂建立記念開帳奉修事務局、一九六八年、二七五頁。成田山の場合も、元禄年間に鉄砲洲の船松町に開創された後、寺社と町場を転々

としている。

(33) 前掲原淳一郎『近世寺社参詣の研究』、二四八頁。

(34) 飯田文弥「御開帳とその意味」(『甲斐路』八九、一九九八年)、「灯笼尊御参内御上京之記」。

(35) 「善光寺記録」一で、「天保九年戊戌十月十四日三江戸日本橋通り三丁目二出張有之御」とあり(前掲『甲斐善光寺文書』二四頁)。「善光寺古記」で天保三年には西の丸の奥より拝領した品々について「日本橋旅宿<sup>江</sup>被下置候へ共、町道場<sup>者</sup>恐入義候得者、国元莊嚴二可相用旨」と「御奉行」(寺社奉行か)より指示されて「右之趣候得者、已来旅宿も永続仕、行々難有奉存候」としていることから、天保期に日本橋通三丁目に恒常的に旅宿が置かれ、大奥からも信仰を集めていたことがうかがわれる(前掲『甲斐善光寺文書』二〇七頁)。

(36) 「善光寺記録」(前掲『甲斐善光寺文書』六七頁、七〇頁、七一頁、一〇七頁)。

(37) 一九一五六。石は、「吉村孫右衛門殿」の寄進によるものであった。

(38) 四一三に「通三丁目横町二先年分甲州善光寺旅宿有之、燈籠仏様御出候所、此度御改革ニ付町屋道場御法度ニ付、芝三縁山増上寺中山下谷端華院<sup>江</sup>御引うつりニ相成申候」とある。

(39) 後述する五輪塔の記載による。前年二月に「永代常念仏再興」に伴う「常念仏料」として金一〇兩を寄進したが、このうち一〇兩を「甲州本尊如来并燈籠仏爲永代供養山林御寄付之御積」として、後々売却しない約束で善光寺内の「大蔵庵所持之山林并畑買取」の資金にあて、残金二〇兩はそのまま預かるという形で購入が進められた(二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七)。

この誓約は、加藤家のほか(二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七)にも報告されていることから(二〇一、二〇二)、菩提寺の哲相院・正覚寺の本寺であり、かつ甲斐善光寺の本寺であった増上寺が仲介した可能性もあろう。また、性善が四代当主への礼状(一四一六)を「御母儀様<sup>江</sup>宜被仰上、御吹聴願上」と結んでいることから、寄進にあたっては、二代後妻の意思も働いていた可能性がある。

(40) 「質入れされた鎧」(吉原浩人『ものがたり 甲斐善光寺』、戎光祥出版、二〇〇三年)。なお、甲斐善光寺には、豊臣秀吉に仕えて甲府を治めた加藤光泰の墓所があり、子孫の大洲藩主が寛保二(一七四二)年に百五十回忌を執行、延享元(一七四四)年には正室の病氣快癒の読経を依頼している(「善光寺記録」(前掲『甲斐善光寺文書』七六頁、八〇頁))。加藤家が自家と何らかの関係を意識した可能性もあろう。

(41) 浄土宗であるので、無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経と推測される。

(42) 前掲岩淵「大店と町」・同「大店」。

(43) 一三一五一。実際に運用されたのかは不明である。

(44) 安政三年正月付で、差出は加藤家と証人の山形屋治衛門、宛先は甲州善光

寺御役僧中・山内十五庵中・起立講御世話人中である。

(45) 年不詳であるが、「起立講世話人惣代」の三人より、加藤家が積み立てた常念仏料金三〇〇兩の受取書がある(一三一二五)。おそらく、この三〇〇兩の大半は、基本的には加藤家の寄進によるものである。

(46) 前掲岩淵「大店と町」表3。

(47) 売却の年次は不詳で、二二二には、「甲州<sup>江</sup>御参詣通夜被遊」とあるが、寄進を決めたのがいつの参詣の時かは不明である。甚左衛門町の屋敷は文政二(一八一九)年以降の所持町屋敷では確認できず(岩淵「大店と町」表2)、おそらくそれ以前の寄進の可能性が高い。この寄進は二二二には記載がないが、性善の礼状で、この時点の作事が「凶年相妨難取続仕合之処、種々工夫手段ヲ以不相休作事相募り、最早両破風并二破風棟<sup>度</sup>上ケ候得共、今迄段々手段相尽し来候故、此上之上棟并箱棟作事又仮葺等之儀ハ如何可致<sup>与</sup>千思万慮痛心仕候」という状況であったことから(一四一四、一四一五、一四一六)年の火災後の堂宇の再建にともなうものだった可能性がある。

(48) 文化二二(一八一五)年に一五兩(二四一、二四二)、同年に五兩(二〇一四四)、天保一一(一八四〇)年に金一〇〇兩(二〇一三〇)、安政五(一八五八)年に二〇兩(二〇一四六)、同六年五月に五〇兩(二〇一六六)、同年一月に二〇兩(二〇一五五)、同七年に二〇兩(二〇一四一)が確認できる。

(49) 一九一四一五。「南の方」に二六人、「西正面の方」に二一人、「北の方」に二七人、「後東の方」に一六人で、加藤家の当主である美濃屋権兵衛と元祖清左衛門は「西正面の方」、ほか別家の五郎兵衛・善六・市郎兵衛などの美濃屋号の多くは「後東の方」となっている。また、商人の中には、親族である河内屋伊右衛門・伊勢屋安右衛門・常陸屋清右衛門がみられた。

(50) 安永九(一七八〇)年一〇月に「大和国三輪大社神人彈正光輝入道浄観」が「東都大仏光雲」に作らせた像の再建とある(一九一四一四)。同文の記載を持つ像が、現在祐天寺に安置されている(<http://www.yutenji.or.jp/history/neenyo/page-33116/page-33491/#jin> 最終閲覧日二〇一九年七月二六日)。なお、同年一二月に鋳物師西村より修復費用の受取書が出されていることから(二二一〇)、この結果に基づいて修復が実行されたことが確認できる。仕様をめぐる圖については後述。

(51) 一九一七五・二二二三の請取書。年不詳だが、同月のため、同じ寄進と判断した。一九一七五の差出が「善導寺世話人」となっているが、加藤家が講に入ったかは不明である。

(52) 野村源光(高橋宝山・高橋鳳雲<sup>ほううん</sup>・松本良山とならび、幕末四巨匠と呼ばれる仏師である(『日本人名辞典』)。「近世仏師データベース」によれば、関東で九つの作品が現存している(<http://www.busslinet> 関西大学文学部 長谷研

究室 最終閲覧日二〇一九年七月二八日。眼にこだわった理由として、多田薬師の利益が眼病の靈験にあったことが考えられる。

(53) 前掲『増訂武江年表』二(二三頁)は、浅草伝法院で信州善光寺如来の開帳が六月から行われたが、「不当り」だったとしている。

(54) 前掲『増訂武江年表』二(九五頁)によれば、同年一〇月に浅草寺本堂の修復が成就し、遷座の上、開帳となった。なお、同書では、修復に伴って外された額の中には再掲されなかったものもあるとしており、多くの額が外されたことがうかがえる。

(55) 一九一七―一五は、額を戻した際の寺からの金子の請取状である。このほか、『浅草寺五輪額修復請取書』の包紙があり、「嘉永元戊申年五月十九日大安吉日奉納候」とされており、もう一度修復して奉納された可能性がある(一九九二―一)。

(56) 一六―一八―二。請取は「富沢町南側 酒巻屋権兵衛」で、同じく同人から年不詳の「浅草寺奉納金」五〇〇疋の請取も出されている(一六―一八―二)。富沢町の者であることから考えて、この寄進は古着の取引関係上の付き合ひであった可能性もある。

(57) 瀧淵坊については『新編相模国風土記稿 三』(『大日本地誌大系』第三八巻、雄山閣、一九三三年、一〇五頁)による。美濃屋加藤家文書には、申・西・戌年五月のそれぞれ金二〇〇疋の「請取」が残存し(一九一七―一四)、申・酉年分には「寄付料之内」「神納」、戌年の「請取」に「御寄付料皆済」とあることから何年分かまとめて先払いしていることがわかる。加藤家が講に入っていたかは不詳である。

(58) 前掲『増訂武江年表』二には、この法会が慈眼大師の発起から同年一月で七万日にあたることで、「緇素老稚群集する事夥し」とある。

(59) 前掲『増訂武江年表』二(一五四―一五五頁)によれば、開帳は深川永代寺で六〇日間行われ、大盛況であった。

(60) 林玲子『江戸店の明け暮れ』(吉川弘文館、二〇〇三年、一三九―一四〇頁)、斎藤照徳「武州葛飾郡小梅村三開稲荷の経営と越後屋三井家」(『地域史・江戸東京』岩田書院、二〇〇八年)など。

(学習院女子大学、国立歴史民俗博物館客員教員)

(二〇一九年八月五日受付、二〇二〇年一月二七日審査終了)

## 参考史料

当家御先祖分御代々御丹誠之義者勿論、別面三代目浄雄居士御相続方荒増子孫江申伝へのため左二書印置候

いつも替らぬ高松のここの葉茂る下草に露受てあらわす君の恵有  
かたし

一 有情非情其数多き中二も難受人身を受けて万国に勝れたる神国に生を得シ事難有奉存、神明の掟を守可申、掟と申て別の事二候ハす、只心正直に国の法度を守り家業出情は申迄もなき事、御先祖御父母大切二致し、下をあわれみ、天照皇太神宮様始め八百万の神々様への御礼毎朝神棚江御念仏を申、御拝可致候、御先祖分浄土宗門なれば元祖円光大師一枚起請文之趣大切二相守、六字分明二面々御念仏相続致、月並二百万遍無懈怠并年忌法事等大切二相勤、諸神諸菩薩御寄進事有之候ハ、毎年積置候法事金より身分相応無名聞、浄財御奉納可致、一家親類之外二ても正直二して衰るものも有之候ハ、随分自分相応之力を添、心付ケ可申事

一 三代目浄雄居士、若年より仏縁深く名聞の心なく日課御相続二て、商売は無怠御励、慈悲心深く、御孝心二て御母公貞三法尼を仏門二入度朝夕二被思召、其頃天誉上人大我和尚、所々の寺院二て 御勧誠有之二付、貞三法尼を度々御参詣二被遣、終に仏門二入給ひ、一向専修御念仏御勤善光寺旅宿江も度々御参詣被成、竹川町大和屋某心願二て建立之四十八鉢之燈籠仏尊像御仏勅二て当家江暫之内奉安置、弥々心信増長いたし、甲州御前性誉上人靈海様 仏の化身とも可存、大徳之御方江御因縁を結び、終二八十三才二て御往生被遊候事、全浄雄居士御孝心厚き故也

一 伊勢三社并鹿島・香取・船橋・神田・明儀(妙義)山・鎌倉八幡、右太々講、秋葉山鳥居講、不忍弁天堂灯明講、甲州善光寺旅宿相続講、樞寺

寺中哲松院永代施餓鬼講取立、其余祐天寺百万遍月掛、善光寺旅宿外十一講等致加入不殘掛切申候

一 甲州江御参詣通夜被遊候節、夢中ニ尊前々長柄々御水頂戴

一 信州江御参詣通夜被遊候、夢中ニ一ツ荅一ツ開たる蓮花頂戴、猶々心倍増長、諸神仏閣江多分寄進被遊候荒増

一 浅草観音様御堂江五輪塔之額奉納、右之内心願書物厨子ニ入

一 甲州善光寺御堂東山林奉納

一 同山之麓江五輪塔形石塔立候而先祖代々法名ヲ印、右塔之下へ流ニ出候鎧一領埋有之、加藤某の着用之由、定而靈夢与存候

一 同本堂東御拝一式奉納

一 同御堂之内五輪法経印塔納、右之内三部経納有之、貞三法尼為極楽往生、観世音靈夢也

一 同御堂江如意輪観音之像為子孫子育納

一 同所永代為百万遍料と、神田蟬燭町地面一ヶ所奉納、其後度々類焼いたし候ニ付、相談之上売却、代金ニて預り置、一ヶ年分金拾八両ツ、永代奉納

一 信州善光寺江祠堂金奉納、為了典居士菩提也

一 哲松院江法経印塔建立、為孝養重安信士菩提也、但し一人之建立者名聞故、諸人寄進相頼名前彫付有之、右之内先年奉安置四十八鉢燈籠仏納申候

一 浅草称念寺江祠堂奉納、為直到宝刹信女菩提也

一 本所靈山寺江祠堂奉納、為先祖代々菩提位牌納有之

一 了典居士像、自身小刀之細工ニて、仏壇ニ安置有之候

一 貞三法尼之画像、自身下絵ニて、嵩月ニ為書候、かけ物毎月晦日ニ掛、御回向仕候事

一 百万遍大之功德ゆへ諸人ニも進メ度、大珠瓊操札箱出来、懇意三十三軒へ遣候、夫より近辺講中出来、月々所々ニて百万遍被勤候、

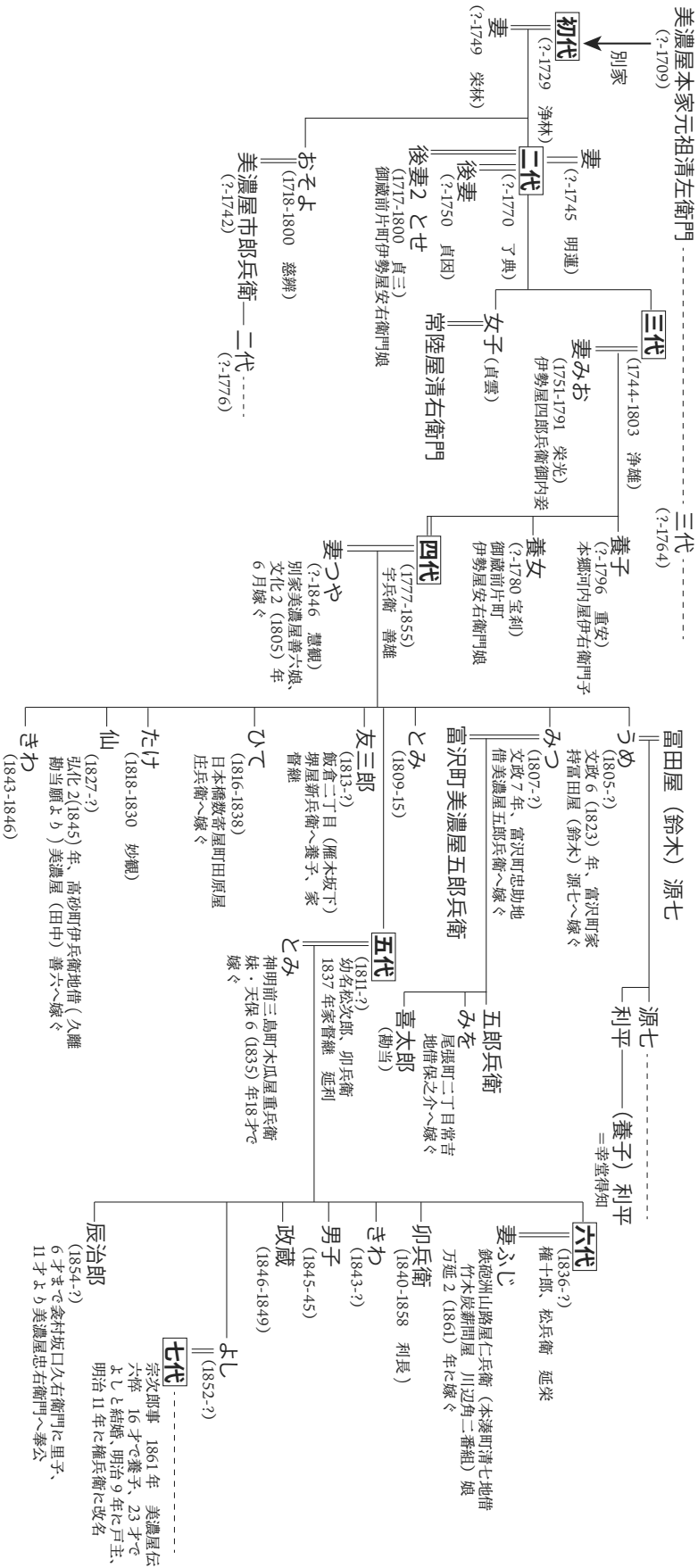
但しくり札名号者檀林方之御筆、右之内蝦夷善光寺開闢之節寄進

一 炭屋久右衛門殿内義、変病煩ニ付、先方江は少も不知、百万遍百座修行、臨終正念ニ往生被致候

一 信州善光寺旅宿多田薬師へ去ル人奉納之本田善光之像、野村源光作ニて出来上り之節拝見被致候所、眼中玉眼ニ無之故、先方江内々ニて仏師相頼玉眼入ニ被致候

右之外善根功德陰德被遊候事数多ニて、中々筆紙尽しかた、猶また御往生之前方親類朋友召仕迄江茂夫々多分之譲り金被遊候、御往生之春、浅草観音地内ニ信州善光寺開帳有之、日参を被遊候折柄、栄光様御同道之御、本堂江御参詣ニて、前ニも印有之五輪之額面心願ニて南向納候所、当年西向ニ成候故、寿命も当年限りと御咄し有之、同六月見勢ニ帳合致居候所、急ニ被呼、自分廿七才之時、家督受継、父了典居士ニ相離候、其方当年廿七才故大切之年柄なれは心附可申与被仰聞候、御病中医師秋山舛貞御往生之後被嘶候二者、兼而十月十日往生可致与被仰候由、少も不違亥年十月十日六ツ時頃今臨終ニ向、越後高田善導寺海苔上人当地ニ旅宿ニ付相招、家内打寄小音ニ百万遍相勤、九ツ過頃、誠正念ニ御往生被遊候、御寿命六十一才、是全一向専修御念仏御相続故与難有奉存、依之拙者義も正直ニ御先祖之家風相守、淨雄居士被仰聞候通相守候故、諸神仏様御影、御先祖様之陰徳ようこふ(影向)ニて相続いたし、栄光大姉(四代当主母)七十七才ニて御往生御見送り、大勢之子供等も無事ニ養育致、今年六十一才ニて悴廿七才ニ相成候ニ付、目出度家督相譲り申候、子孫永々右之心得ニて相続為致度あらまし斗り書印置ものなり

南無阿弥陀仏  
天保八丁酉年極月八日



付図 美濃屋加藤家系図 (4-3 「(美濃屋家譜及び天保十一年頃の公私日記)」・8-3 「記録諸事控」・16-5 「過去帳」(ほかより作成)

was the result of messages from the Buddha, which formed part of the Katō family's faith.

Faith among Edo merchants has been addressed in behavioral culture studies about temple visits with elements of tourism, and participation in religious festivals. However, these should be examined as part of a bigger picture that includes faith practices in everyday life.

Key words : Edo merchants, donations, temple pilgrimages, behavioral culture

---

## Edo-based Merchants' Faith and "Behavioral Culture" Studies: Messages from the Buddha in Practice

IWABUCHI Reiji

Due to limitations in terms of historical documents and interest in research of the history of commerce, research on Edo merchants has for a long time been limited to analysis of the Edo branch stores of foreign merchants whose headquarters were in Kyoto, and especially of only certain types of stores, such as those dealing in drapery. In recent years, there has been a growing number of studies on Edo-based merchants, but examinations of their spiritual beliefs have been lacking. This paper looks at the large-scale merchant Minoya Katō family, who worked with pawned and second-hand goods in order to examine the beliefs of large-scale Edo-based merchants.

Since Pure Land Buddhism was the basis for the Katō family's faith, it's goal was to accumulate *intoku* (secret acts of good) and journey to the Pure Land. Therefore, it performed services for his family's ancestors, gave aid to others, and organized various Kō(religious association), in addition to making donations as a family organization (merchare Dōzoku). Avoiding celebrity and secretly doing good(Intoku) are line with Sekimon-Shingaku's belief on which many merchants based their faith.

Particular objects of it's faith included *Kai Zenkō-ji* and it's *bodaiji* (a Japanese Buddhist temple for a family's dead), named *Tessō-in*. Regarding *Kai Zenkō-ji*, it donated large sums of money for its restoration after fires that occurred 1754, and it continued these donations afterwards through Edo *ryoshuku* (house of worship). Regarding the *bōdaiji*, it not only held services for it's ancestors there but in the end also built an Edo *ryoshuku* at *Kai Zenko-ji*. It's donations even went as far as influential Pure Land temples like *Shinshū Zenkō-ji*, *Takada Zendō-ji*, and *Honjo Reizan-ji*, which was one of the important 18 Pure Land temples of Kantō recognized by the shogunate. It did not limit itself to only Pure Land temples; it's faith extended to temples in other sects as well as Shinto shrines, leading it to hold services for it's ancestors at Mount Koya and to make donations to *Asakusa Kannon* (Sensō-ji) and *Seiryō-ji*.

Due to this faith, the Katō family relied on revelatory dreams and messages not from the Buddha only for familial rites of passage but also for standards of judgment in business. Though it is impossible to know what it truly believed, at the very least, these methods were accepted and played an important role. Furthermore, visits to various temples and participation in public exhibitions of religious objects—that is, events outside the scope of daily life- did not change it's level of faith. It's participation in them